

実践報告

ダウン症を持つ学生の論文執筆とその支援

茂 大 祐

日本福祉大学 学生支援センター

佐 藤 慎 一

日本福祉大学 全学教育センター

Support of Down Syndrome Student's Thesis Writing

Daisuke SHIGE

Student Support Center, Nihon Fukushi University

Shinichi SATO

Inter-departmental Education Center, Nihon Fukushi University

Keywords : ダウン症, 論文執筆, 困難さ

概要

本稿は、本学に在籍していたダウン症をもつ学生が卒業論文を完成させるに至るまでの過程、また、ゼミ担当教員と学習相談室による指導・支援の実践報告である。大学教育において、困難を抱える学生が増え、適切な配慮や対応が求められている。抱える困難さは学生によりさまざまであるため、画一的な対応のみでは不十分であり、多様な配慮、幅広い視点での調整が必要である。本実践においても、当該学生の特性を考慮し、試行錯誤しながら各種の支援を実施した。具体的には、情報通信機器を活用した密なコミュニケーション、ワークシートの提供などによる執筆支援等を行い、一定レベルで機能したと思われる。一方で、一般的な対応を超えて相当に踏み込んだ支援でもあり、適切な指導・支援であったのか検討する必要がある。特別な支援が必要な学生に対して、どこまでの配慮をすべきであるか、より多くの事例を蓄積・共有し、継続的に検討していく必要があると考えている。

1. はじめに

本稿は、ダウン症を持った学生の論文執筆と、ゼミ担当教員と学生支援センターによる支援の事例を報告するものである。近年、様々な障害を持つ学生が高等教育機関に入学するようになってきた。これまでは身体障害を持つ者に目がいきがちであったが、最近では、発達、精

神、内部疾患などを持つ者も入学するようになっている。

2016年4月に施行された障害者差別解消法においては、こうした学生に合理的配慮を行うことが、国公立大学では義務、私立大学では努力義務として規定されている。不当な評価をせず、柔軟な対応や配慮をすることが求められる。本稿で紹介する事例が、合理的な配慮につ

いて検討していくための一助となればと考えている。

なお、本稿の執筆に際しては、対象となる学生に対面での事前説明を行った。個人名を表記しないこと条件に、紀要として公開されることになった場合の承諾も事前に得た。

1.1 障害を持つ学生の実態

現在全国の大学には、多くの障害学生が在籍している。本学においても、全国各地から多くの学生が入学し、様々な配慮・対応が行われている。以下、日本学生支援機構の報告から、障害学生の実情を記述する。

大学では、障害学生数、障害学生在籍率ともに平成18年度以降増え続けている。特に「精神疾患・精神障害」、「病弱・虚弱」、「発達障害（特に「高機能自閉症」と「ADHD）」の障害学生数や支援障害学生数の増加が顕著である。また、「精神疾患・精神障害」と「発達障害」の障害種については、支援を受けている障害学生の割合が平成18年度から平成25年度にかけて、約2倍に増加している。

1.2 ダウン症の特徴

ダウン症は、医学的には、第21番染色体異常であるとされている。染色体型はトリソミー型、転座型、モザイク型があり、第21番の常染色体が3個存在するトリソミーが93%と、染色体異常疾患の中で最多である。発生頻度は0.1%であるが、40歳以上の高齢出産の場合には、より高率となる。転座型は、再発率が10%~20%と高い。また、累代発生を認める場合もある。予後は、心疾患、消化管奇形、白血病等の合併症が生じなければ比較的良好であるが、平均寿命は健常人より短い。アルツハイマー病の合併率も高い。ダウン症には個人差があるが、池田(2007)、ライト(2015)等をもとに一般的な見解をまとめると次のようになる。

- ・長期記憶が良いが、時間の経過を把握するのは苦手であるため、適宜確認をして物事を進めていく必要がある。
- ・抽象的、漠然とした話は理解しにくいので、物事を伝える時など、説明は具体的に行うことが重要となる。
- ・ひとの気持ちを汲み、思いやりに富み、感受性が強い。優しいがゆえに、気持ちが感化されやすく、気持ちの起伏が大きい場面がある。

- ・目で覚え、観察力・形態認知・空間認知に優れ、模倣が上手である。この特徴から、芸術や表現を重視した行動が優れている場合がある。
- ・言葉で表現するより行動にあらわすほうが早い。言語化することよりも動きで表すなど、物事を伝える時には、様々な表現方法をとることが望ましい。
- ・耳から理解することは比較的弱く、話をしっかり聴くのも苦手である。視覚的な補助があることで、相手の意思を理解できる可能性が高くなる。
- ・想像力や空想力が豊かで、適度であれば想像・空想がストレス解消にもなる。ただし、想像力が強すぎることにより自身の世界に没頭してしまうことや他の事が耳に入らない場合もあるため、切り替えを適切に行う必要がある。
- ・独り言をいうことがあり、ストレス解消に効果があるが、声のボリュームや状況などを考え、場所を選ぶ必要がある。
- ・手は器用、ただ動作が幾分遅く、経験不足で手・指の筋が弱体化している。
- ・筋力の低緊張があり筋量は一般より少ない。
- ・薬が効きすぎ、薬の副作用がしやすい傾向がある
(池田, 2007; ライト, 2015 をもとに著者が要約)

ダウン症の者はしばしば頑固であると言われる。これは、ダウン症特有のコミュニケーション能力(理解した言葉と表出したい言葉のギャップ)や情動認知能力(急激で一時的な好き嫌いの感情)などの複合的な理由によるものと言われている。

甘やかされて育てられた結果ではなく、ストレスコントロールの困難さや、生活経験を含めた環境要因の影響もあると推測されている。特定の人との関係や特定の環境により頑固さが顕著に認められる場合などには、環境や人間関係を丁寧に見つめ直し、支援の手がかりが把握する必要がある。

2. 対象学生と支援の方法

2.1 対象学生支援と役割

本学に所属していたダウン症を持つ学生の論文執筆とそのプロセスについて、対象学生、対象期間、支援内容等の情報を表1に示す。

学習サポート室では、原則毎週月曜日と木曜日に、大学の授業などにおける学習方法や学習計画などの相談を

表1 支援対象の学生および支援内容等

対象学生	モザイク型ダウン症の女性 (学生 A)
特徴	知的障害は無いとされているが、抽象的・論理的な思考の弱さは、明らかに感じられる。一生懸命に取り組む姿勢はあるが、マイペースなため、進むスピードは必然的に遅くなる傾向がある。自分自身の気持ちと相反することが出てきたときには、拒否をする場面もある。その場合、音信不通となることもあった。また、障害の受容について消極的であり、話題とすること自体を拒むこともあった。
対象期間	20XX年5月～20XY年3月(対象学生の4年次)
支援内容	論文執筆(その他、学生支援センターでは一般講義科目の学習支援も行っている)
指導・支援場所	ゼミ担当教員研究室ならびに学習サポート室、さらに、オンラインでのコミュニケーション

行った。学生支援センター支援員や支援スタッフが、状況をみながら交代で対応した。レポート提出や試験が近くなると、レポートの作成方法や試験勉強の方法を助言するなど、状況に応じた学習支援を行った。

学生支援センターと学生相談室で共同作成した「便利帳」というスケジュール管理ノート希望者に配布しており、学生 A にも渡して活用した(図1)。日々の予定などを確認することを目的としたものである。内容は、学年暦、スケジュール、単位の確認などがあり、スケジュールを視覚的に把握できるように工夫されている。また、試験や進級などの予定確認のページや、連絡先や公共交通機関の時刻メモなどの、日常生活支援のための情報も巻末に載せられている。

卒業論文の執筆支援については、対象学生ならびに担当教員と連絡調整を行いながら進めていくこととした。週2回の学習サポート、毎週の授業の他、情報通信機器(ICT)も状況に応じて活用して、学生 A、学生支援センター支援員、担当教員で連絡を密にしていくことを事前に確認した。担当教員と支援員の役割を表2に示す。

3. 卒業論文の執筆と支援の実態

3.1 執筆に至る経緯

学生 A が4年生を迎える直前の3月に、学生相談室

と学生 A、両親との間で相談が持たれ、4年次学習に関する確認が行われた。この際、卒業論文執筆の大変さが相談員から学生 A と両親に伝えられた。学生 A の所属学部では、卒業論文は必修ではないため、他科目で単位要件を満たして卒業する選択肢も話し合われたが、結果として本人と家族の意向を尊重する形で、執筆に挑戦するということが確認された。なお、この際、ゼミ担当教員も同席するように調整を試みられたが、全員が参加できる日程の調整がつかずに、ゼミ担当教員はこの打合せに参加していない。話し合いの結果報告を受け、ゼミ担当教員と学生 A とで個別面談が行われ、論文執筆の大変さ、書き上げられないことのリスクについて伝えられたが、学生 A の意志は変わらず、論文を執筆に挑戦することとなった。執筆スケジュールの概要を表3に示す。

3.2 ICT を活用した支援

ダウン症に起因すると思われる困難さから、学習サポート室での対応時にも、学習状況の把握には従来から困難がともなった。そのため、学生 A が検討している内容や執筆の状況を引き出し、支援のための手がかりをより多く得ることを目指し、対面での支援以外にも、ICTを活用したコミュニケーションを進めた。具体的に実施した方法を以下に示す。

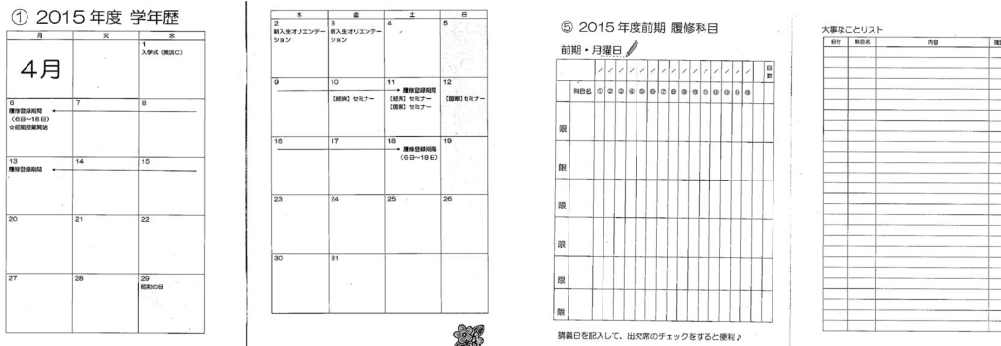


図1 便利帳

表2 担当教員と支援員の役割について

	役割
教員	<ul style="list-style-type: none"> ・授業での指導 ・論文骨子の作成支援 ・論文の確認・校正 ・ICTを用いた学生・支援員とのコミュニケーション環境の設置 等
支援員	<ul style="list-style-type: none"> ・書き出し帳の作成・支援 ・執筆における不安な点の相談 ・授業での指導内容の理解状況の確認 ・障害を鑑みた執筆しやすい方法の提案 等
教員・支援員共同	<ul style="list-style-type: none"> ・ICTによるコミュニケーション・状況把握 ・スケジュール確認・調整 (論文執筆時のリマインド等)

表3 スケジュール概要

時期	活動の概要
4月	テーマの可能性を複数検討する
5月	テーマを設定する
6月	類似の取り組み・先行研究を調べる
7月	類似の取り組み・先行研究を調べる
8月	章立てを組み立てる
9月	調査・研究を進めて執筆する
10月	調査・研究を進めて執筆する / 論文第1版提出
11月	中間発表 (ゼミ内) / 論文第2版提出
12月	最終調整 / 論文提出締切
1月	発表会資料準備 / 論文発表会

(1) メール

学生Aの大学から発行されているアカウントとメールでのやり取りである。ゼミのメーリングリストがあるため、ゼミ生向けの一斉連絡が中心であるが、学生Aとの個別連絡も行われた。しかし、学生Aからの反応が十分には得にくい状況であったため、以降に示すような対応も行うこととした。

(2) 学内 SNS (Google+) およびファイル共有

ゼミで運営されている Google+ のコミュニティがあったが、踏み込んだ支援が必要と判断されたため、学生A、支援室、ゼミ担当教員のみコミュニティを別途設定することとした。学生A専用の指導であり、指導等の履歴も時系列に蓄積されるため、学生Aは指示内容を何度でも容易に確認することができる。

学生Aは、これまでも学内 SNS に自ら投稿することが観察されたため、論文執筆につながる手がかりとしての情報が投稿されることも期待した。また、学生Aを励ますための日々の声かけにも活用した。

卒業論文用の文書ファイルは Google Docs (詳細は 3-3 に記述) で作成・共有し、Google+ のコミュニティからもアクセスできるようにした。本共有ファイルは、学生A、ゼミ担当教員、相談員が編集することができ、

また、変更をリアルタイムで確認することもできる。最新のファイルがどれであるかについての混乱がなくなるとともに、どれだけ進んだか / 進んでいないのかを直接的に確認できるなどの点で有効であった。

(3) LINE

本人から、LINE での連絡が一番やりやすいという申し出があり、ゼミ担当教員との密な連絡のために、11月中旬より、LINE での連絡も行うこととした。従来から、メールでの反応が滞りがちになる状況も見られたため、本人が心的な負担も少なく一番容易に使えるという点を尊重し、対応することとした。LINE でのコミュニケーションは、ゼミ担当教員のみが対応することとし、共有すべき情報については、ゼミ担当教員から個別に相談室へ連絡することとした。

以上のような形で、さまざまな環境を活用して調整を行った。一定のコミュニケーション、情報共有は行えたものの、総じて、学生Aに執筆を促したり、反応を求めたりするためには多くの時間を割くこととなった。

3.3 論文執筆について

(1) テーマ決定までのプロセス

卒業論文のテーマはいくつか考え、4年次のゼミの中でも学生Aから随時報告されたが、十分に深めていくことはできなかった。そこで、2015年7月、指導教員と相談の上、自分が体験したことからテーマを見出そうということになり、体験を時系列に書き出していくことにした。その中で、幼少期から継続して英語学習に関する記述が多く得られことを踏まえ、英語学習を中心に書いていくこととした。しかし、ゼミ内での一斉指導のみでは、学生Aは執筆に取り掛かれないう状況が続いたため、学習サポート室で書き出し帳 (図2) を作成して執

論文執筆に向けての情報書き出し手帳

<p>英語学習について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いつごろから学び始めたのか、きっかけなど (例) いつごろから：小学校3年生1学期 きっかけ：学校の友人に「一緒に勉強しない」と誘われた。 	等
<ul style="list-style-type: none"> ・どのように英語を修得し始めたのかなど (例) 海外の文化に興味を持ったため、英語を学びたいと思った 外国人とお話したくて習い始めた 日本の国語と違いがあって、文法や英語の構造に興味を持った 	等
<ul style="list-style-type: none"> ・学習年表 (例) 学校では、いろいろな英語の歴史を学んだ。 塾では、…… 学校と塾での学びの違いはなに?? 	
<p>学ぶための工夫について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習において難しかったこと (例) 日本語の発音などが大きく違うこと 	等
<ul style="list-style-type: none"> ・難しさを克服するための工夫・努力について (例) ノートにたくさん書いた 誰かに聞いてもらった 	等

図2 書き出し帳

筆の支援を行った。

この書き出し帳を埋めていく作業を9月から開始したが、当初はこのフォームに書き出すことも十分にはできず、学習サポート室に持参し、わずかに記載された情報について、支援員が質問をし、質問に回答させながら、書き出し帳を埋めさせるようにした。こうした過程を経て、英語学習で多くの苦勞をしていること、苦勞を乗り越えるために工夫をしていることにも気づくようになった。また、苦勞の中には、自分の性格や特徴だけでなく、ダウン症の一般的な特徴も影響しているのではないかと考えるようになったようである。これらのことを踏まえて、卒業論文のタイトルを「ダウン症当事者としての英語学習事例研究」とすることにした。ここまで予想以上に多くの時間がかかり、提出締切まで残り1ヶ月となった。

(2) 執筆の実際

テーマ決定後、指導教員と相談しながら、論文の枠組みを固めた。各章や節に記述する内容の骨子について、学生と指導教員で相談しながら進め、その内容は支援員とも適宜共有された。しかし、記述内容の概要を共有し

た上でも、それに従って学生Aが十分に記述を進めることはできず、対面で話し合い、学生の思いを引き出しながら、教員が例となる文章を複数提示することも行われた。学生Aは、これらの文章を自分の言葉に修正したり、新たな文章を追加したりした。

以上のように、手がかりとなる文言を引き出し、それをもとに、論文として展開できる形の文案を提示して学生Aが自分の言葉に修正したり肉付けしたりする形での進行となったわけだが、これら作業にはGoogle Docsを活用した。Google DocsはWebブラウザで利用可能な文書作成ソフトである。いわゆるクラウド型のシステムであり、データ本体がネットワーク上にあるという特徴をいかし、複数人が同時にファイルを編集することができる。従って、学生Aが書いている状況を、遠隔からネットワークを通じてリアルタイムで確認することができる。また、スマートフォンからの利用も可能であり、学生Aは、しばしば、スマートフォンからも文章を書き足していたとのことである。長い論理的な文章を記述するための検討をスマートフォンの小さい画面で行うことは難しいと思われる。しかし、スマートフォンから気軽に考えたことの断片が記入されることになり、

表4 執筆フェーズごとの学生の状況と支援の概要

	学生の状況	担当教員・支援員の支援
テーマの検討	自身で検討することは困難	担当教員や支援員と話しながら、執筆したいテーマの具体化を支援する。
内容執筆	自分で書くことは困難	支援員より書き出し帳を提案する。学生専用のLINEグループなどを設置する（リマインドの効果を狙う）。
プランニング	計画を立てて進めることが苦手	授業や学習サポートに出席した時に、執筆・完成に向けて必要な過程や作業を認識させる。
経験（事実）の記述	本人の経験であるため、比較的書き出しやすい様子	絵や図など、学生自身が学びやすかった方法などを入れることを提案する。
第三者にわかりやすい表現・要件とされる文章量の記述	論理的な文章表現をすることが難しく、文章量を増やすことができない。	本人と対話や書き出された手がかりとなる情報をもとに、サンプルとなる文章を提示する。
計画（教員・支援員との約束）に基づく執筆	約束の記述が守られないことを指摘した場合、深刻に受け止めていないように思われることがある一方で、泣き出すこともあった。	実情として学生の力でできる範囲を見定め、計画および支援範囲を見直す。
最終段階（最終の約2週間）	指示された点に関しては、一定、対応するようにはなった。論文全体を鳥瞰的に見て校正することは難しい様子であった。	欠けている場所、執筆が必要な場所の提示し、日々の進捗を確認する。

指導・支援のための手がかりとして、一定、有効に機能したものと考える。

卒業論文の検討・執筆のフェーズごとの学生の状況、支援の概要を表4に示す。

3.4 学生Aにより執筆された論文の概要

執筆された論文では、学生Aが英語で英検準2級を取得し、さらに進んだ学習を進めるまでに至る過程が紹介されている。ダウン症を持つ当事者として、障害、学習における困難さに向き合いながら、自身の特徴を踏まえた学習方法の工夫なども紹介されている点で評価できる内容であった。学生Aの所属学部では、卒業論文（卒業研究）の単位取得のためには、学部内で行われる卒業論文発表会での発表が必須となっている。学生Aも、この発表会にて発表し、ゼミ担当教員以外の教員からも、他の学生と遜色ないレベルの論理構成・発表内容であったとの評価を得ている。ただし、ここまで記述してきたように、他の学生と比べると遥かに大きな支援が、教員と支援員から行われている点には留意が必要であり、評価を考える上での課題でもある。

4. 執筆と支援に関する考察

対象学生における論文執筆に関しては、本人の取組状況を見ながら支援していく必要があった。例えば、スケジュールを立て、段階的な到達点を設定しても、十分に認識できていないのか、自己管理が甘いのかなどの詳細

は不明であるが、予定したような中間成果は十分に得られなかった。そのため、担当教員と支援員との間で何度も調整を行った。一方で、本人の「論文を執筆したい」という意識だけは変わらなかった。言葉と行動の乖離があり、それを埋めるための説明や支援が必要であった。

論理的な文章を記述することは、一般の学生にも難しいが、学生Aが一人で文章作成をすることは特に難しかった。スケジュール管理や情報収集など、執筆以前のところにも困難が伴った。ダウン症の特徴となる、頑固さの影響により進みにくかった側面も多かったように思われる。状況に応じた柔軟な判断が難しく、一度決めると修正が困難であるうえに、動きがゆっくりしていることもあり、殆どの場面において順調に進むということにはなかった。困難さを地道に把握し、周囲の環境を十分に整え、適切な支援範囲であるかに疑問を抱きつつも、卒業論文を完成させるために必要と考えられる多くの支援（詳細は「3.卒業論文の執筆と支援の実態」に記述）を行ったことによって、執筆が完了したものである。

3-3にも記述したように、例えば、スマートフォンからも気軽に書き込める環境・ファイルを整え、考えの断片、キーワードだけでも記述させ、それらをゼミ担当教員、支援室指導員が拾い上げ、文章化の支援を行った。具体的には、拾い上げたキーワードから、学生Aが表現したいと思われる文章の案を教員・支援員の方で作成し、対面時にコミュニケーションしながら文章を作成する、ということを行った。その後の肉付けは学生Aが

行うとともに、他のキーワードからの文書化に関しては、学生 A 自身で行っていくことを期待した。こうして卒業論文を作成した結果、学生 A と相談しながら、ゼミ担当教員、支援員の方で作成した文章も埋め込まれている。元となるアイデアは学生 A 自身のものであり、学生 A の考えを文書としたものではあるが、果たしてそれが適切な支援の範囲であったのかは、不安・疑問に思う部分である。過剰な支援ではないかとの不安も抱きつつ、はじめてのケースということもあり、完成を最優先して、必要な対応を進めた（進めてしまった）部分もある。これら支援の妥当性を検討するとともに、持続的に対応可能な範囲を見極めていくことも必要だろう。

5. まとめ

学生支援を行う中で、様々な支援で学生のモチベーションを向上させていくことは、多くのエネルギーを必要とする。そのため、支援員は直接的な声掛けや指導などを定期的に行ってきた。しかし、直接方法のみでは難しい状況にも直面した。そのため、ICT を活用したフレンド型の支援にも取り組むことで、学生自身の意識を仕向けることができたと考えている。本実践においても、ICT を活用することで論文執筆の支援が成り立ったものと考えている。学びの方法はさまざまであることから、それぞれに合う学習方法を認識することが必要であり、ICT を含め、支援のためのツール・選択肢を増やしていくことも必要であろう。

本実践では、本人の意向と学習経過を勘案しながら、教育的支援を行った。一方で、本実践については、担当教員、支援員含め、支援の程度が過度であったのではないかと考えている。学生 A の能力を超える支援を行ってしまった可能性もある。卒業論文としては完成したという結果・実績が、学生 A の卒業後の進路を考えた場合、はたしてプラスとなるのか、逆にマイナスになってしまうのではないかと、という懸念もある。

今後は、学生に必要な一定の学力基準のもとで、的確な合理的配慮に関する知見を持つことが必要となろう。様々な事例を蓄積・共有しながら、知見を築き上げていきたい。

引用・参考文献

デイヴィッド・ライト（大谷誠訳）（2015）ダウン症の歴史、明石書店

独立行政法人 日本学生支援機構（2015）大学・短期大学および高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査分析報告

池田由紀江（2007）ダウン症のすべてがわかる本、講談社

ジークフリート・M・プエスケル（百溪英一監訳）（2008）ダウン症の若者支援ハンドブック、明石書店

NPO 法人アクセプションズ（n.d.）<http://acceptions.org/>

岡庭豊編（2008）看護師・看護学生のためのレビューブック第10版、メディックメディア

資料 論文執筆の流れ

月	教員・支援員の対応	学生の反応
5月	・4月の段階から卒論を書くという旨を聞いていたことから、どんなテーマで書きたいかを聞く。	本人からはそこまでの反応はなく、それよりも前期講義の課題で焦っている様子が見られた。また、ゴールデンウィーク明けもあり、ぐったりしている模様であった。
6月	・ゼミで担当教員から卒論に関する話があり、学習サポートで相談をする。	本人いわく、前期の講義でいっぱいのため、あまり考えることができないということである。
	・本人の興味あることをホワイトボードに書き出しながら、テーマ設定の絞り込みを試みる。	卒論についてあまり実感がない様子で、なかなか浮かんでこない。その中でも言葉で出てきたことは、アニメが好きなので、その方向で書きたいという話になる。
7月	・何度か学習サポートで学習を重ねる中で、本人から少しずつ具体的なテーマ概要が発せられるようになる。論文のスケジュールと同時に、便利帳を見返して、科目の講義が取れているか、総合的に確認する。	執筆するテーマとして、自分についても見つけて書いていきたいという反応がある。講義のレポートで、自分史の話になったのがきっかけであったという。
	・試験期間と重なっていることもあったため、頭があまり卒論にまで回らない状況である。よって、支援を重視するとともに、卒論についても気をぬかないように行う。	試験勉強で、疲労感を持った状態で学習サポートに来る。途中、両立がなかなか難しくなってきた、少し混乱した時には泣きながら課題をこなしている状況も見られた。ただし、集中力が継続的に続くわけではないので、休憩する場面がたびたび見られた。
8月	・夏季休暇期間に卒論の内容を考えるように伝える。自分史やエピソードにまつわることを書き出してもらう。	休暇期間は連絡がつかず、一旦停止状況となる。そのため、テーマがある程度固まったという程度で進む。
9月	・後期が開講し、卒論執筆とともに、講義の受講も始まる。そのため、前期と同様、複数で混乱している。	学習サポートに来室の際、「卒論できてない」という報告がある、どうしたいかと尋ねると、逃避をするような表情をされていた。
10月	・書く内容が全く整理されていない状況である。そのため、何を中心に書いていくかを整理するために、「書き出し帳」を作成して、本人に埋めていってもらう。	ゼミでの講義とともに、学習サポートで相談をする。書き出し帳についても、自分自身でする限りコントロールできるように話しながら進める。本人からは、頑張る意思が示された。
	・書き出し帳に記入したものをメールで送ってもらい、やり取りを行う。わかりにくいところや抽象的な部分は、質問形式でより具体的に書いてもらうように促し、内容に膨らみを持たせるようにする。	本人から書けるところは書いたというように連絡があるが、確認すると不明なところが多々ある。本人から頑張ってくれようという意思が示され、自身の中ではかなり満足している状況と感じる。
11月	・この時点で、講義系科目との兼ね合いも出てきて、少しずつペースが乱れ始める。主軸を卒論一本に持つてはいきたいものの、単位的な不安要因があるため、双方の調整をする必要がある。	卒論について、これまでメール等でやり取りを進めていたが、少しずつ反応が少なくなる。学習サポートなど対面には来てくれるので、その時に話をすると、頑張ると一点張りの状況である。そのため、停滞気味な状況である。
	・本人、担当教員と交えて、執筆計画を練り直す。進み具合からしてできるのかという不安があったために、最終的に確認を行う。	本人からは、執筆したいという意思が出る。そこで、提出期限などを明確にしながらいつまでに提出する必要があるかなどを改めて確認すると、ノートに記していた。スケジュールを確認するうえで、便利帳と予定を照会する。執筆できていないことを確認するが焦りはない。
12月	・18日が提出期限ということもあり、月頭から執筆活動に挑むように働きかける。 一方で講義科目における最終講義も迫ってくることから、バランスを取りながら学習を進めていくように調整を行う。	この段階で、進み方が著しく低下するときがある。そのため、一週間の予定表を作成するなどして、確実に進められるような体制をつくる。ただし、本人は自身の思いとは違う予定ということで不満を訴えていた。
	・提出期限1週間前には、基準の分量からすれば大幅に足りないということもあったために、担当教員と双方で、執筆方法を促しながら援助を行う。本人にしか書けない経験の場面のところは、より具体的に丁寧に書くように促す。	本人の活動しやすい時間は夜ということもあったので、それに合わせて対応する。時間が深夜に及ぶこともあり、相応に追い込みをしながら頑張っている状況であった。